

114
A 4413



第七號覺書

十二月二十三日附第四十二號覺書ノ第七節千八百七十五年四月五日附第四十五號覺書千八百七十五年五月三十一日附征臺史記第五回ニ管シ嘗テ土耳其帝國ニ於テ外國新聞ノ其國政府ニ向ヒ誹謗罵詈ヲ為ス害ヲ防制センカ為メ設ケシ法律ノ事ニ付キ今ヲ去ル一九月以前ニイ、エツチ、ハウズ氏ヨリ君士坦丁府駐劄米國公使ジョージ、エツチ、ボークル氏江問合セシ箇條

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈



ノ返答トシテ同公使ヨリハウス氏へ贈リタル
返書ノ寫(別紙第一號ヲ見ル可シ)ヲ極メテ内密
ニ閣下ニ進呈ス但シ同公使ノ返書ニハ右新聞
紙ノ弊害ヲ防止スル為メ設ケタル法律ヲ添エ
タレハ其寫シモ亦共ニ閣下ニ進呈ス(別紙第二
號)

ボークル氏ハ米國ノ公務ニ在テ其地位頗ル貴
ケレハ其ハウス氏へノ返翰ニ記スル重大ノ事
件ノ如キハ極メテ内密ニ非レハ之ヲ人ニ漏ラ
スヲ得ス故ニ同氏ノ返翰ニハ「私用ノ語ヲ記

シハウス氏モ初メノ程ハ余カ其返翰ヲ寫取ル
ヲ承諾セサリシカ余ヨリ同氏ニ告クルニ其寫
ハ全ク閣下一人ニ進呈スルノミニシテ敢テ他
人ニ示ス為ニアラサル旨ト且ツ閣下大政官ニ
於ケル閣下ノ御同僚ト内密會議ノ節日本國ノ
利益ノ為メ之ヲ活用シ給ハンヲ閣下ニ乞フ
可キ旨トヲ以テセシニ因リハウス氏漸ク之ヲ
寫取ル可キヲ承諾セリ

右ニ言上スル所ハ固トヨリ法律ノ寫シニハ係
ハラスシテ其寫シハ印刷セシ者タレハ猶海外

ニ派出セシ日本公使ノ手ニ入レタルカ如ク政
府ノ適意ニ之ヲ用フルコトヲ得可シ
又右ノ事件ト直接ノ關係アルニ付キ嘗テ日本
在留米國公使ノ職ヲ務メシハルリス氏カ條約
中ニ記入セシ領地外裁判權ノ箇條ノ為メ日本
政府日本ニ在ル外國ノ人民並ニ外國ノ利益ニ
管スル事件ニ付キ其法律ヲ設クヘキ主權ヲ幾
許カ限制シタルヤ其限制ノ度ヲ問合センカ為
メハウズ氏ヨリ右ハルリス氏へ書翰ヲ贈リシ
カ(別紙第三號)ハルリス氏ヨリ其返翰ヲ差越シ

タレハ其返翰ノ寫シ(別紙第四號)ヲモ共ニ閣下
ニ進呈ス蓋シハウズ氏ノ余ニ告ケタルニハ右
ハルリス氏ノ書翰ハ閣下之ヲ内密ノ者ト看做
スニ及ハス閣下ノ御意次第何人ニ限ラス之ヲ
示シ又閣下ノ御好ミニ任カセテ之ヲ世上ニ公
ケニ為スモ敢テ差支ナキ由ナリ
余今右書類ヲ閣下ニ進呈スルノ重要ナリト思
フ所以ハ横濱新聞紙ノ調子日ニ耐忍ス可ラナ
ル様子ニ至リ余カ嘗テ第四十二号覺書ニ指示
シタル如ク之レカ為メ終ニハ極メテ東京ノ新

聞紙ニ響應スルニ至ル可ク既ニ近頃ハ閣下ノ
注意シ給フ如ク東京ノ新聞ニ稍其為ニ感動
セラル、ノ端緒ヲ開キタレハナリ謹言

千八百七十五年六月二十日東京ニ於テ

チャールス、レゼンドル

大日本帝國
大藏卿
大隈重信閣下

114
A

別紙
費書四十七号相取



大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

并啓仕候足下トルコノ出版條例取調ノ御用ノ
御都合ニ可相成ト存ジ右條例差出シ且
ツ右條例ハ該國ニ於テ隨分嚴重ニ施行仕候趣
奉申上候右條例ニ據ルトキハ何カ原因ノ有之
候節ハ新聞紙ヲ全停止スル一モ珍ラシキ事ニ
ハ無之候
凡テ是等ノ事件ニ於テハトルコ人ハ獨立國タ
ルノ權利ヲ要メ之ヲ行ヒテ自己ノ政畧ニ從ヒ
内國ノ事務ヲ調理シ外ヨリノ建言等ニ感動セ
ラル、事ハ無之候日本人モ一時モ早ク右様ノ

權ヲ要ムルトキハ日本ノタメニモ宜敷且ツ其
地ニ住居スル外國人ノタメニモ宜敷奉存候
此事件トルコニ於テハ道理上ニテハ外國人モ
許容致シ候得共交際上ノ止ヲ得サル次第ニヨ
リテトルコ人モ少シク其處置ヲ替ヘ候事モ有
之或ハ妨害ヲ蒙ル^レモ有^ル併固トヨ^ク該國ノ
獨立ノ權ヲ犯シ候事ニ御坐候間拙者ハ同僚ト
モ數々議論致シ且御承知ノ通り外務省ヨリ嚴
命有之ニ非サレバ決シテ其事ニ同意不仕候
鹿兒島事件ニ付キ日本ノ辨解ノ感服スベキモ

ノヲ封シ込タル書付ヲ御廻シ被下千万奉奉存
候右事件ノ當否ハ拙者從前理解不仕候

拙者事ハコンスタンチノープルヲ去リテシ
ト、ベートルズビユルグニ發程用意中ニ付キ書
狀モ自然ニ簡畧ニシテ意ヲ盡ス^ル能ハス此餘^段
御海容可被下候○足下ノ幸福ヲ奉祈候謹言

コンスタンチノープル
アメリカ合衆國公使館

千八百七十五年
四月二十三日

ジラ、エイチ、ボークル署名

イ、エイチ、ハウス氏
足下

券字別紙

帝國土耳其 公譯

出版國法

第一編 一般成規

第一條 政治或ハ公務上ニ関スル論說ヲ如何

ナル國語ニ関ヒス定規ニ從ヒ且日支ヲ定メ或

ハ一冊ニ編シ不規則ニ出版スル所ノ新聞誌或

ハ定期著述書ハ帝國政府ノ許可ヲ經スニテ

レテ創造刊行スヘカラス

若シ其申請主土耳其人ナル時ハ其許可申請ス

文部省ニ出シ若シ外国人タラシハ其願言ニ
外務省ニ出スヘシ
該申請ヲ查收セシ省内ニ於テ第三條ニ掲示ス
ル所ノ諸成規ニ照準スルヤ否ヲ調査シタルノ
后一ノ許可ヲ與エ且ツ出版事務局ヨリ其免証
ヲ付スヘシ

第二條 一州内ニ於テ刊行スヘキ新聞紙或ハ
定期著述書ハ許可申請ヲ鎮臺ニ出シ候負第一
條成規ニ照シコレヲ外務或ハ文部省ニ送リ候
省ニ於テ第三條ニ掲示スル所ノ諸成規ニ照準

スルヤ否ヲ調査シタルノ后許可免証ヲ鎮臺ニ
送ルヘシ

第三條 第一條内ニ記載スル所ノ許可ハ一般
土身機人ノ齡三十ニ達シ刑法内ニ掲クル大小
罪科ヲ負ツス且ツ民法固有ノ者ニ与ヘシ
外國人ニ於ルモ亦本國法内ニ示ス所ノ責任及
ニ義務ヲ本國人ト一般遵奉スル者ハ之ヲ許可
スヘシ但シ違式或ハ小罪審裁方法ハ本國人全
様由身機政府裁判所ニ於テ委任ス
第四條 刊行許可申請ニ從テ其所有主或ハ書

任管事ノ之ニ手署シテ、新聞紙或ハ定期著述
書名日支期限及、刊行スル、印刷所ヲ具裁ス
ヘシ○所有主或ハ責任管事ハコンスタンチー
ノブル府ニ於テハ出版事務局其他ノ州ニ於テ
ハ其鎮臺ニ新聞紙或ハ定期著述各ノ刊行毎
一号ヲ、署名シテ出スヘシ

毎新聞紙ノ最下ニ所有主或ハ管事責任者ノ
署名ヲ印スヘシ

第五條 新聞紙或ハ定期著述書ノ所有主或ハ
管事ノ責任者、政府ヨリ附与セシ許可ヲ他

人ニ譲与セント欲スルハコレヲ出セシ省ニ又
事件ヲ上申スヘシ○所有新主或ハ新管事ノ責
任者ハ第一條二條及、三條揭示ノ成規ニ照準
シ許可ヲ得ヘシ

新聞誌ノ名称日支期限印刷所ノ變換處ニ
テ全省ニ上申スヘシ
第六條 皇國內現存ノ政治ニ関スル諸新聞紙
或ハ定期著述書ハ本國法内示ス所ノ許可ヲ請
フニ不及已ニ得シ所ノ報告ヲ以テ標準トナス
ヘシ

以上ノ諸新聞紙ハ本國法拘示ノ諸規ニ應ジテ
テ刊行スルヲ得ヘシ

第七條 各紙或ハ各號上ニ署名スル者ハ他ノ
署名セサル者ノ諸論說上自己其責ニ任スヘシ
○若シ其論說上他ノ署名アルモノ、審裁ニ係
ル時ハ各紙各號上署名ノ者ハ本人トシ味ノ者
ト認ヘシ

第八條 新聞紙内一般ニコシヌタシテ、
ルニ於テハ出版事務局他州ニ於テハ地方官ヨ
リ送ル所ノ官報ヲ初号或ハ二号内ニ登載スヘ

シ但シ無事ニテ編入スヘシ諸新聞紙亦其誌内
記載掲示シタル諸人ノ答書ヲ無費ニテ編入ス
ヘシ○其答書ノ長サハ首唱論說ノ二倍ヲ超過
スルカラス

第九條 政治或ハ公務上ノ論說ニシテ且ツ帝
國政府ニ對シ抵抗爭鬪ノ目的ヲ以テ外國ニ於
テ刊行シタル諸新聞紙或ハ定期著述者ヲ皇國
内ニ輸入シ運搬スルヲ禁ス

第二編 刑法成規

第十條 政府許可ヲ得ズシテ刊行シタル諸新

新聞紙或ハ定期著述各一冊或ハ一冊ニ付キ
耳機回金十リーブルノ罰金ヲ命スヘシ且ツ其
刊行シタル新聞紙或ハ定期著述各ヲ停止ス
第十一條 定期著述各ヲ官ニ納メ署名ニ関ス
ル第四條成規ニ違式罪ハ罰金十リーブルヲ命
ス

第十二條 第八條ニ記スル所ノ官報或ハ記載
指示シタル諸人ヨリノ答答ヲ編入セサル所ノ
新聞紙或ハ著述各ハ二リーブル半ヨリニテ五
リーブルノ罰金ヲ命スヘシ但シ他ノ罰方或ハ

其論說内信金ニ関スル事件アル時ハ罰金ノ外
タルヘシ

第十三條 何人ヲ不論刊行各上ニテ刑法内(第
一)章才ニ卷(皇國安寧靜肅ニ對シ大罪科ニ擬
スヘキ諸般事件ノ首唱人ヲ煽動スル者ハ其罪
科ノ輕重ニ準シ一昧ノ者ト認メ公罪ニ處スヘ
シ○以上眾科ヲ釀成シタル新聞誌ハ公務官ヨ
リ之ヲ停止シ或ハ禁止スヘシ
第十四條 新聞誌ヲ以テ世ニ品行良風或ハ
諸教法又皇國內ニ設置スル諸寺院ニ對シ非議

凌辱等ノ件ハ一リトブルヨリ二十五リトブル
ノ罰金或ハ一周ヨリ三月間ノ入獄ヲ命ス
ヘシ

第十五條 國帝及ヒ皇族ヲ誹謗シ帝威ヲ蔑如
スル者ハ罰スルニ六月ヨリ三年ノ入獄或ハ二
十五リトブルヨリ五十リトブルノ罰金ヲ以テ
ス

第十六條 皇帝陛下ノ執政或ハ皇國諸侯ニ誹
謗スル者ハ一月ヨリ一年ノ入獄或ハ五リトブ
ルヨリ五十リトブルノ罰金ヲ命ス

第十七條 本朝ト和親通商ヲ結ビタル諸國君
或ハ政府首長ヲ誹謗スルハ三月ヨリ三年間ノ
入獄或ハ十五リトブルヨリ百リトブルノ罰金
ヲ命ス

第十八條 人身上名譽德望ニ関スル事件ヲ記
載シ或ハ妄証スルハコレヲ誣トナス
諸誹謗侮謗ノミニシテ事蹟ヲ記セサルヲ失言
ト言フ

第十九條 裁判院裁判局及ヒ官府ニ對シテノ
謗言失言ハ十五日ヨリ一年ノ入獄或ハ二リ

アルヨリ五十リトブ... 罰金ヲ命ス

第二十條 諸公務官吏ニ對シ謔ニ擬スヘキハ

十日ヨリ十月ノ入獄或ハ一リリブルヨリ四十

リリブルノ罰金ヲ命ス

第二十一條 本朝ニ派遣ノ國使公使代理公使

及シ其他官吏ヲ謔スルハ八日ヨリハ一月ノ入

獄或ハ一リリブルヨリ三十リリブルノ罰金ヲ

命ス

第二十二條 一般人民ヲ謔スルハ半リリブル

ヨリ十五リリブルノ罰金或ハ五日ヨリ五月ノ

入獄ヲ命ス

第二十三條 諸人或ハ公務官吏ヲ謔シ其事ノ

全ク私事ニ係ルモノハ国法揭示ノ罰法ヲ以テ

必ク不所分ヌヘシ○公務官吏或ハ其他コレニ

関スル者ヲ謔シ其論說職務上ノ件ニシテ確証

アル時ハ記者ニ罰法ヲ命セス但シ以上ノ者ニ

對シ記載シタル所ノ失言ニ照スル罰法ハコノ

外タリ

第二十四條 第二及ニ二十一條ニ揭示シタ

ル諸人ニ對シ失言シタルハ五日ヨリ五月ノ入

獄或ハ半リールブルヨリ十五リールノ罰金ヲ命ス

第二十五條 諸人民ニ對シテノ失言ハ二日ヨリ二月ノ入獄或ハ三十ビヤストルヨリ五リールノ罰金ヲ命ス

第二十六條 私意ヲ挾ミ確實ナラザルモノノ嚴造或ハ詐偽ヲ刑入シタルモノ、刊行或ハ再刊ハ罰スルニ一月ヨリ一年ノ入獄或ハ十リールヨリ五十リールノ罰金ヲ以テス

第二十七條 第十九、二十、二十六、二十七及ヒ三十一條ニ

載スル所ノ小罪ハ公務官ヨリ一月以内刊行停止ヲ以テ罰ス

第二十八條 司法官ヨリ裁シタル罰法ハ本年内新聞誌或ハ定期著述卷ノ一子内ニ編入スヘシ

一個或ハ數個ノ新聞誌内ニ編入スヘキ罰法斷議ハ本人又賈ヲ償フヘシ

第二十九條 司法官ヨリ二年内ニ三個ノ罰ヲ命シタル新聞誌或ハ定期著述卷ハ公務官ヨリコレヲ停止シ或ハコレヲ禁止スルヲ得ヘシ

第三十條 出版條例上六小罪科或ハ遠式罪ヲ以テ管事或ハ所有主責任者入獄間新聞誌或ハ著述春刊行ハ他ノ管事、本國法内ノ成規ヲ遵奉セシ者ニハミコレヲ許可スヘシ

第三十一條 出拔條例上罪科ノ裁判所ニ於テ審裁スヘキハ原告人ノ申請ニ從ヒ此他國帝及

ハ上族ヲ誹謗シ帝威ヲ蔑如シ執政且ツ世上風習ニ関スルハ特權以テ之ヲ令スヘシ

諸教法或ハ皇國內設置スル所ノ諸寺院ニ對シテノ事件ニ付キ教法官ノ申請ニ從ヒ特權ヲ以

テ之ヲ裁スルヲ令スヘシ

第三十二條 公務將ヲ人民上ノ事件ニ付キ罪科ヲ犯シタルハコレヲ刊行シタル日ヨリ令六

月間ニ命スヘシ
第三十三條 罪狀再犯ノモノハ司法或ハ公務官ヨリ前將ヨリ一陪以下ノ罰法ヲ增加スヘシ

第三十四條 第三十五十六十七十九二十二一及ヒ二十四條ニ指示スル罪科ハ都府内ニ設ク

ル五名ヨリ編成スル理事局ニ付シ候官候儀ニ照シ大集會ニ於テ其將法ヲ下令ス

本國法内ニ載スル他ノ條款ニ照スル罪科及ヒ
違式ハ警視裁判所ノ審裁ニ付ス
第三十五條 本國法ハ一千八百六十五年一月
一日ヨリ實行スヘシ

土身機政府

官報 譯書

第一 一千八百七十三年十一月三十日ノ印証
帝規則ハ一千八百七十五年三月十三日ヨリ實
行スヘシ

第二 帝規則ニ照シ製造スヘキ印証紙ハ才一

ハツリカラ帝章ノ周圍ノ白色紙上ニ金額及ヒ

税額ヲ示ス文字及ヒ數字ヲ印シタル黑色印証

紙^{ニハ}第六ニカイデアレテリアリエノ文字ヲ印

出シタル印証紙ニシテ貼用印証紙亦ツカラ帝

章ヲ印ス

第三 現今供用ノ定額印証紙及ヒ十ピアスト

ル以下ノ比較額印証紙共ニ一千八百七十五年

三月十三日後モ混用シ得ヘシ但シ十ピアスト

ル以上ノ税額ニ供スルモハ新造ノ税額ト等

シカラサルヲ以テ三月十三日ヨリハコレヲ供
用スヘカラス○一千八百七十五年六月十三日
マテハ都府ハ印証紙局他州ハ不直税局ニ於テ
並貴ニテ新送印証紙ト交換スルヲ得ヘシ

新聞誌

第四 特異貼用印証紙ノニパラストス 貨幣ノ税
額 モノヲ 都府及テ諸州共ニ新聞誌各号上
ニ貼スヘシ○新聞誌廣告書上ニ該印証紙ヲ貼
スルハ第一葉上部ニ刊行前コレヲ糊貼スヘシ
○コレ其印証紙ヲ再用スルヲ得ス且テ新聞誌

廣告等ノ刊行前己ニ証紙ヲ貼用シタルヲ証ス
ルカ考ナリ○刊行文字ノ一部ハ印証紙上ニ印
シ且ツ印証紙ノ文字全ク不分明ニ至ラサルニ
注意スヘシ○新聞誌廣告等ノ若シ此則ヲ欠モ
ハ不貼ト認ムヘシ

株金會社

第五 百分ノ一ノ定税ハ会社商社等ノ假定或
ハ確定ノアクシヨシ 利金分配ニ列ス 及ヒオグ
リガリシヨシ 定額利子ヲ得ヘ 帝詔ヲ以テ許
可シ或ハ許可スヘキモノニ課シ會社或ハ商社

ヨリ之ヲ納ルスル一千八百七十五年三月十三
日以後ニ至リ設立シタル會社或ハ商社ヨリ出
ス所ノアタシシヨシ或ハアブリガリシヨシ証
合印帳簿ヨリ切取り帳簿及テ紙片ニ紙上ニ
印証紙ヲ貼用スヘシ

一千八百七十五年三月十三日以前ニ出シタル
アタシシヨシ及テオブリガリシヨシハ合印帳簿
或ハ此他已ニ出セン証合ノ全額ヲ確証スルモ
ノニ照シ會社或ハ商社ヨリ上ニ記載セン如ク
細税シ不直税惣局ヨリ之ヲ都府新聞誌ヲ以テ

公告スル時ハ印証紙ヲ貼用シタルモノト一般
タルヘシ

以上ノ如ク納税シタル証合ハ其所有主ノ申請
ニヨリ印証紙向ニ於テ無費ニテ押印シテ付与
スヘシ
一千八百七十五年三月十三ヨリ六月間ニ百
分ノ一ノ税額ヲ納ムヘキヲ會社或ハ商社ニ行
可ス

此定期後連式ノ件ハ印証紙規則内第二十四條
ニ載スル所ノ符令ヲ命スヘシ

印証紙賣場

第六 都府ニ於テハ官ヨリ指示スル所ノ零賣
店ニ於テ之ヲ賣售シ其店前ニバラカネサセヘ
ベアールノ文字ヲ鑄タル一枚ヲ出スヘシ諸
州ニ於テハ税関及ヒ不直税局官ヨリ指示スル
所ノ零賣店ニ於テコレヲ賣与スヘシ
普通用紙ニ貼スル非常ノ印証紙ハ都府内印証
紙局ニ於テノミコレヲ所置スヘシ

一千八百七十五年二月十八日

第三種別紙

方今外國人條約ノ箇條ヲ論議スル毎ニ日本ノ
近シク論駁スル其規定ノ一部ヲ抗辯スル為メ
屢貴下ノ名ヲ用フルハ頗ル異常ノ事ニシテ外
國人ノ言ニハ常テ確固正直ナル日本ノ親友ト
リシ公使ノ初メテ規定セシ税別及ヒ領地外裁
別權ノ規則ハ之ヲ論駁スルノ理ナシト為スト
虽ニ余ハ之ニ答ヘテ曰ハシ千八百五十八年ノ
規則ハ當時ノ景狀ニ適セル一時ノ便法ニシテ
敢テ尔餘ハ各國ト全シク自カク其外交ヲ修メ

内事ヲ整フ可キ十分ノ國權ヲ有スル國ラシテ
永久之ヲ遵守セシム可キ者ニアラスト蓋シ日
本ハ外國交際ノ初メニ當リ其未熟ノ過チテ豫
防スルノ緊要ナルヲ為メ極メテ下等ノ歐洲小
國ト雖モ現ニ保有セル權利ヲ有スルトナキハ
其國ノ為メ取リヘキ事タリ而メ方今日本ニ在
ル公使輩ハ其要需スル所ヲ抗辯スル為メ貴下
ノ名ヲ用フルト雖モ余ハ貴下ノ考定及ビ感情
ノ真ニ全ク之ニ及セルヲ確信スルカ故ニ此事
ニ付キ貴下ノ真情ヲ公ケニ告クルヲ余ニ許ル

言
シ給ハ、余ニ於テ深ク感謝スル所タル可シ謹

千八百七十五年 東京ニ於テ
一月十七日 伊、エツチ、ハウス

タウンセント、ハルリス貴下

判紙 四號 覺書四十七號相添

拜啓仕候去ル一月十七日附ノ御慇懃ナル書狀
正ニ落手仕候拙者事日本人民ノ幸福ニ関係ノ
事ニ心配仕候ハ其深切ナル事言語ニ尽シ難候
○向キニ千八百五十八年ノ江戸ノ條約ナル者
ニ附添タル税則ハ全ク拙者ノ作りタル者ニ御
坐候然ル處右ノ條例一モ議論起リ候事無之又
日本ノ委官ヨリ改正ノ事ヲ申出タル事モ無之
候右前代未聞ノ事ハ何故ナルヤト勘考仕候處
元來輸入税ノ規則ノ事并ニ海関税ノ收メ方ノ
事ハ日本人一向之ヲ知ラサルヨリ事實止ラ得

サル事ト奉存候借日本入ハ自ラ其事務ニ練熟
セサルヲ申述テ拙者事公平不偏ノ處置ヲナス
ベキト信シ全ク拙者ニ倚頼仕候當時拙者ハ交易
開業ノ前ニ先ツ輸入税ヲ定ムルニ非ザレハ何如
ナル困難ノ起ルモ難測ト奉存候間開港ノ前ニ
貿易ノタメ規則ヲ立ツベキヲ專要ト仕候且
日本ノ委官常々申候事モ有之候夫レハ日本ノ
委官モ條約改正ノ時高到來迄ニハ相應ノ其事
務ニ練熟シテ自ラ之ヲ處置スルノ場合ニ可至
ト申候併シ一人ノ一生ニ於テモ全十箇年ハ容

易ナラザル事ニ有之候得共一國ノ終始ニ於テ
モ左様ニ無之候ト申候○真ニ一國ノ内務ニ係
関ノ事ニハ拙者ヲ預スルノ權アリト申候事ハ
一切無之候抑々他國ノ内務ニ干預仕候事ハ人
ノ國ニ勝ツ時ノ事ニテ萬國公法上ノ權利ニハ
無之候條約書中ニ領地外ノ權ヲ附與スルノ箇
條有之候得共右ハ拙者ノ本心ニ背キ候事ニ御
坐候既ニ向キニ千八百五十五年合衆國ノ外務
卿ゴーブルノルマルシイト面會ノトキ右領地
外ノ權ヲ附與スル事ハ他國ノ内法ニ對シ安リ

ニ于預スル事ニシテ西洋各國ナラハ瞬間特モ
許容スベキ事ニアラズ右ノ箇條ヲ條約書
中ニ加ヘザレハ東方ノ國ト條約ヲ結フ事ハ難
成ト被申候愚考ニハ合衆國ノ元老ハトルロペ
ルシマ及ヒアフリカノ「バルバリー」ノ諸國トノ
條約ヲ先例トメ之ヲ捨テサリシ事ト被思候拙
者ノ一生ニ右ノ不正ナル箇條ヲ條約書中ヨリ
除去スルヲ見シハ難相成ト奉存候ト候其除
去ノ事ハ偏ニ希望スル事ニ御坐候
拙者ノ事ヲ忘レサル日本人ニハ宜敷御傳聲奉

願候

千八百七十五年

三月廿二日

ハウジ氏
之下

ニウヨルクニ於テ

タウンセンドハリス署名

